

ボランティアグループのリーダーの活動における問題意識に関する研究

A Study of problem awareness about activities of leaders of volunteer groups

守本 友美

I. はじめに

ボランティアに関する研究は、これまでも多面的に行われてきた。松田（2009）は、それら多くの文献において、ボランティアの定義を示す内容ではなく、理念や原則を説明する内容（性格や条件ともいう）が書かれていることが多いと指摘している。一方、ボランティア活動は自発的・主体的な活動であるから、参加動機に関する研究も広く行われてきた。先行研究の潮流から参加動機をどのように捉えるかにより竹内（2021：61）によると、①「利他主義の精神が表出した行動であるとする見方の研究」、②「利己的な動機に基づいてなされると考える研究」、③「複数の次元によって構成されるとみる立場の研究」の大きく3つに分けられる。また、妹尾・高木（2003）の研究で「ボランティア活動がボランティア個人にもたらす様々な経験効果」が明らかにされ、広崎ら（2006）の研究において「ボランティア個人の生きがいや楽しみ、自己実現の観点」から論じられるようになり、ボランティア活動が「自分のため」という観点からの考え方が浸透し始めてきた。このように、「自分のため」と考えるボランティア活動希望者にとって、ボランティアグループに所属し、活動の楽しさややり甲斐を仲間と共有できることは、ボランティアにとっての活動継続要因ともなっている。これに関しては、田中ら（2021）が地域における子育て支援ボランティアにインタビュー調査を行い、活動継続の理由として「メンバー間の関係性」、「活動の意義の共有」を挙げた者が多かったという結果を出している。また、守本（2022）もボランティアへのインタビュー調査を実施し、メンバー等の人々との交流を楽しんでいることで、活動への意欲も向上し、主体性形成が図られていくことを明らかにした。

以上のように、ボランティア活動に参加する人にとっては、活動を意義あるものにし、楽しんで継続していくためにはボランティアグループの中の関係性が重要であることが明らかになった。しかしながら、ボランティアグループに関する研究は、いかにグループを安

定して運営していくかという組織論（長沼：2014、田尾：2019）や巡（1981）によるリーダーシップの研究に留まっており、地域共生社会実現のための、ボランティアグループと社協のような専門機関との連携・協働の取り組み方については言及されていない。以上のような背景を踏まえて、本研究においては、ボランティアグループのリーダーが活動について感じている問題意識を明らかにすることを目的とする。その際に、それぞれの活動開始動機との関連性について検討することも目指す。

II. 研究の方法

本研究では、A県のボランティア連絡会の役員64名に対して郵送による無記名式自計式質問紙法による調査を実施した。64名に調査票を郵送して送付した結果、43名から回答を得た（回収率67.2%）。調査実施時期は2022年10月～11月であった。得られた量的データはExcelを用いて分析した。

III. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守して実施した。調査票には説明文書を添付し、その中に調査の実施および結果の公表や配慮事項等について記載した。また、調査は匿名で行われること、調査票の返送をもって調査協力に同意したものとみなすこと、同意しない場合も不利益を被らないことも同様に記載した。なお、本研究は周南公立大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」による承認を得ている（承認番号：5）。

IV. 調査結果

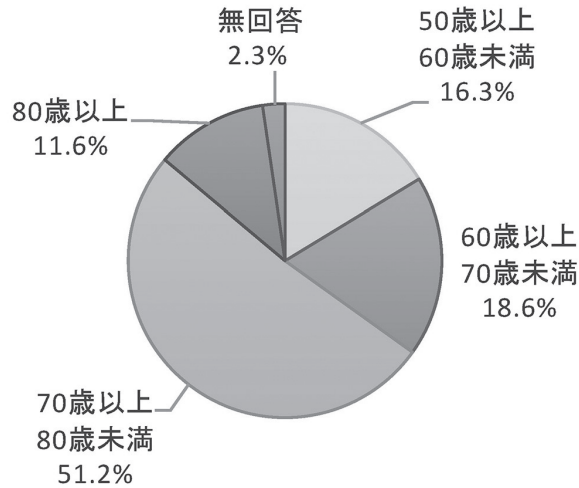
1. 基本属性

回答があった43名の性別は、表1に示す通り、男性が全体の46.5%であり、女性は51.2%であった。

年代は、図1に示す通り、70歳以上80歳未満が全体の51.2%を占めた。

〈表1〉 対象者の性別

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	男	20	46.5
2	女	22	51.2
3	その他	1	2.3
	無回答	0	0.0
	回答者数	43	100

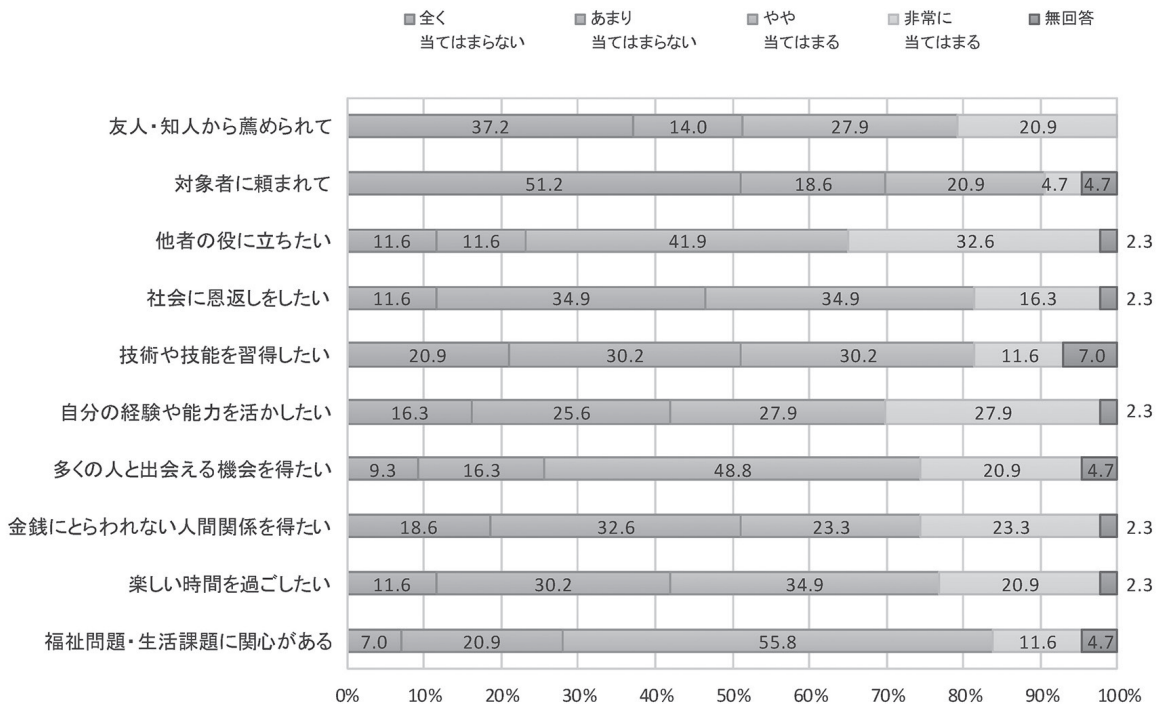


〈図1〉 対象者の年齢

2. 活動をはじめた動機

各項目に対する回答は図2に示すとおりである。
この4件法において、「全く当てはまらない」を1点、

「あまり当てはまらない」を2点、「やや当てはまる」を3点、「非常に当てはまる」を4点として数値化し、各項目の平均値を算出したのが、表2である。



〈図2〉 活動をはじめた動機

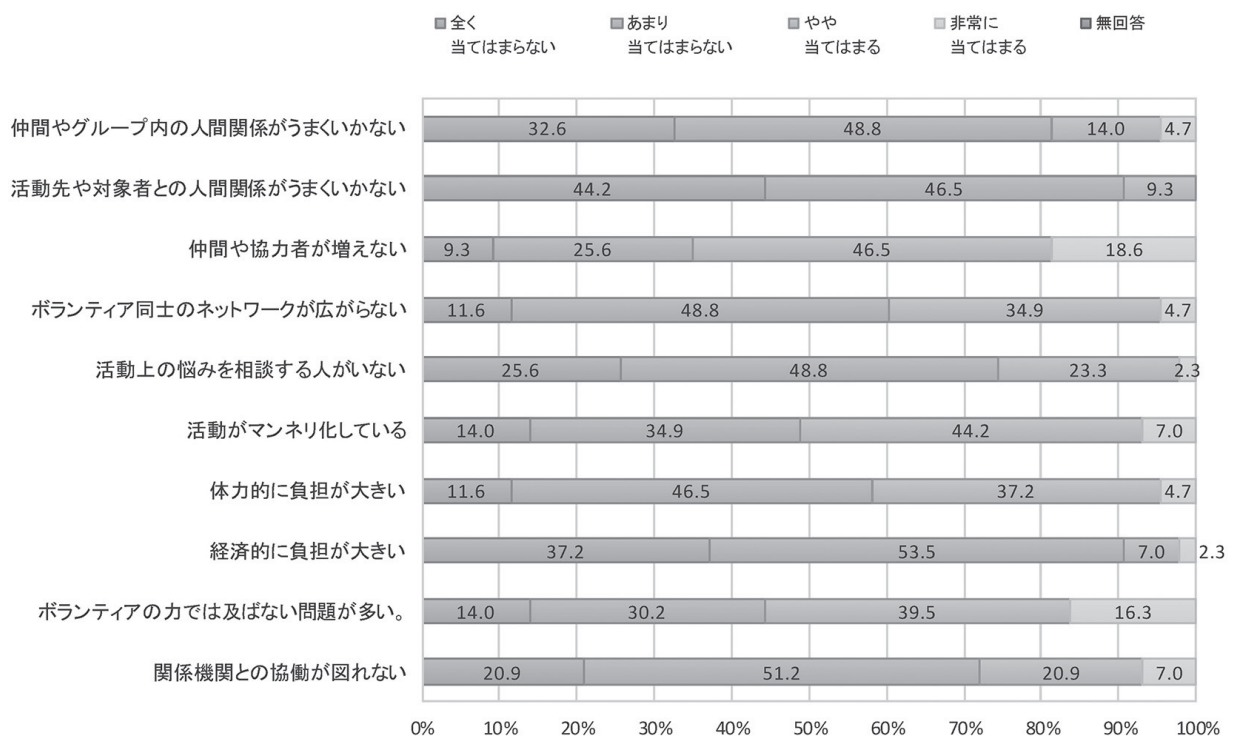
〈表2〉 各項目の平均値

項目	平均値
友人・知人から薦められて	2.33
対象者に頼まれて	1.79
他者の役に立ちたい	2.95
社会に恩返しをしたい	2.56
技術や技能を習得したい	2.35
自分の経験や能力を活かしたい	2.67
多くの人と出会える機会を得たい	2.81
金銭にとらわれない人間関係を得たい	2.51
楽しい時間を過ごしたい	2.65
福祉問題・生活課題に関心がある。	2.73

3. ボランティア活動について問題や課題だと感じていること

各項目に対する回答は図3に示すとおりである。

同じく、この4件法を数値化し、各項目の平均値を算出したのが、表3である。



〈図3〉 活動についての問題や課題

〈表3〉 各項目の平均値

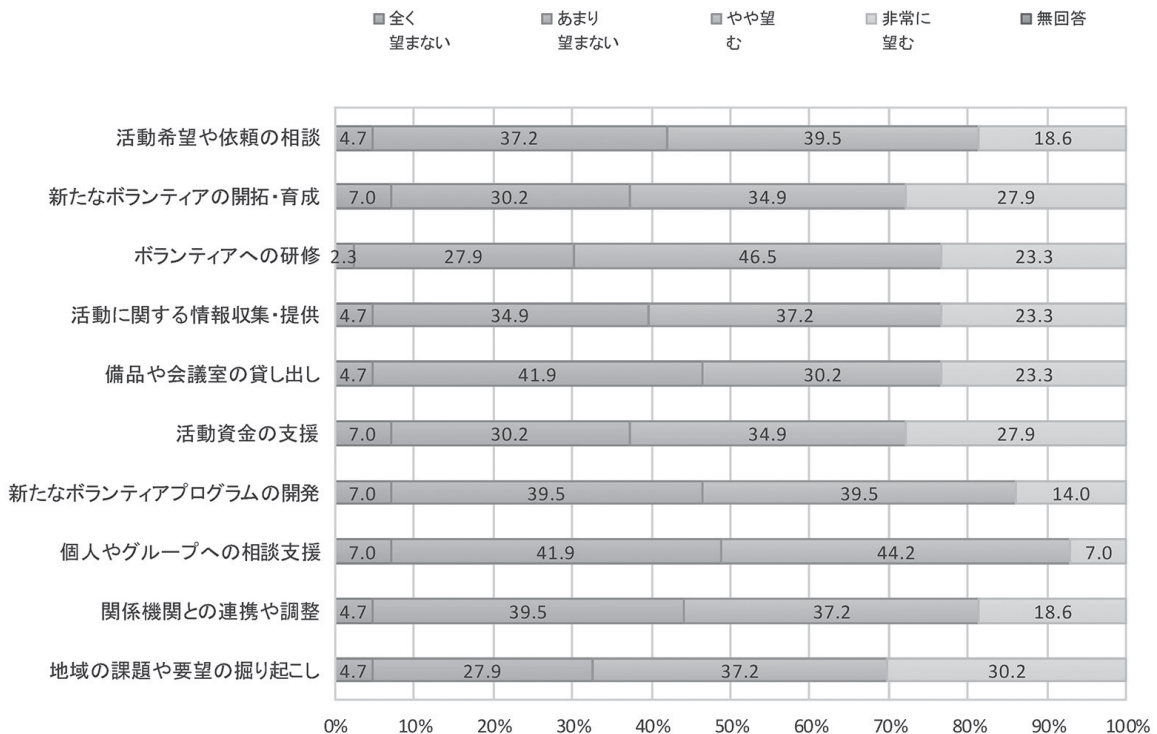
項目	平均値
仲間やグループ内の人間関係がうまくいかない	1.91
活動先や対象者との人間関係がうまくいかない	1.65
仲間や協力者が増えない	2.74
ボランティア同士のネットワークが広がらない	2.33
活動上の悩みを相談する人がいない	2.02
活動がマンネリ化している	2.44
体力的に負担が大きい	2.35
経済的に負担が大きい	1.74
ボランティアの力では及ばない問題が多い	2.58
関係機関との協働が図れない	2.14

4. 社協ボランティアセンターに望む支援内容

各項目に対する回答は図4に示すとおりである。

同じく、この4件法を数値化し、各項目の平均値を算出したのが、表4である。

〈図4〉 ボランティアセンターに望む支援内容



〈表4〉 各項目の平均値

項目	平均値
活動希望や依頼の相談	2.72
新たなボランティアの開拓・育成	2.84
ボランティアへの研修	2.91
活動に関する情報収集・提供	2.79
備品や会議室の貸し出し	2.72
活動資金の支援	2.79
新たなボランティアプログラムの開発	2.60
個人やグループへの相談支援	2.51
関係機関との連携や調整	2.70
地域の課題や要望の掘り起こし	2.93

V. 考察

1. ボランティア活動を始めた動機について

4件法で尋ねた質問項目で、各質問の回答値の平均で最も高かったのは、「他者の役に立ちたい」であった。伝統的なボランティア活動の捉え方として、その特性は「自発性・主体性」、「社会性・福祉性」、「無償性・非営利性」と表されてきたが、「世のため、人のため」という「社会性・福祉性」を求めて活動を始め人が多いという結果になった。近年はボランティア活動の新しい捉え方として、千葉（2010）は「古典的」ボランティア観から「市民的」ボランティア観へのパラダイム転換の可能性を論じているが、ボランティアグループのリーダーとして活躍しているシニア世代は、「古典的」ボランティア観で捉えられるボランティア活動に魅かれていたのだと考えられる。

また、次に値が高かったのは、「多くの人と出会える機会を得たい」であった。調査協力者の多くは、定年退職を迎え職場での日常的な人間関係は途切れている状態である。本研究における調査でも、無職の方が62.8%という結果になった。また、子どもも独立し、家族内の人間関係も限定的になっている。そのような世代だからこそ、新たな人間関係を求めて活動を始めたと考えられる。その際に、職場における利害関係などを抜きにした関係、つまり助け助けられながらお互いの理解を深め合い、活動を展開していけるような協働関係を求めているのである。

そして、次に値が高かったのは、「福祉問題・生活課題に関心がある」である。これは、最も値が高かった動機である「他者の役に立ちたい」とも関連している。ボ

ランティア活動を始める前から、「福祉問題・生活課題に関心がある」ので、困っている人や助けを求めている人を放っておくことができないのであろう。

2. ボランティア活動に関する課題や問題について

同じく、4件法で尋ねた質問項目で、各質問の回答値の平均で最も高かったのは、「仲間や協力者が増えない」であった。この点については、筆者がボランティア関連の講座の講師として活動を行っていた2010年代から、受講生の声としてしばしば聞かれたフレーズである。大都市、地方都市を問わず、受講生のボランティアから「グループのメンバーが増えない」、「人口の高齢化とともに、グループも高齢化している」という意見が出されていた。これに対して筆者は、「頑張り続けられるところまで続けるべきである」、「どうしても続かないということであれば、グループの解散、活動の中止もやむを得ないので」と伝えてきた。振り返ると、全く他人事のような回答だが、それから10年以上経過した現在も状況は変わっていないのである。その当時、60代や70代で活躍されていた方が、70代、80代になられて活動を続けているということなのである。

次に値が高かったのは、「ボランティアの力では及ばない問題が多い」であった。そもそも「福祉問題・生活課題に関心がある」という動機で始めた方々は、活動開始後も地域の福祉問題・生活課題には敏感であり、関心も持ち続けている。その中で、自分にできることを考えて行動されてきた。しかしながら、近年の福祉問題・生活課題の複雑化・多様化によって、ボランティアができることの限界を感じているということである。例えば、ひ

きこもり、虐待、ヤングケアラーなどの問題は、気づくことができてもボランティアが関わることは困難である。また、昨今のコロナ禍によるボランティア活動そのものの制限についても、ボランティア自身が解決できる問題ではない。本研究における調査で「緊急事態宣言下での活動状況」を尋ねたところ、「中止していた」が32.6%、「活動回数を減らした」が32.6%となっており、活動継続に苦慮していた状況が分かる。岡本（1981：42）が述べているように、ボランティアというのは、「福祉的課題、すなわち問題やある危機状況を読みとり、それを自分の問題として、すすんでその解決的行為に走る人のこと」である。現状では、複雑化・多様化する問題を読みとり、他人事ではないと考えられたとしても、解決的行為が見いだせないのである。

三番目に値が高かったのは、「活動がマンネリ化している」であった。巡（1981：192）が述べているように、ボランティアグループは「何か社会的な福祉的課題に関心を抱き、それに目を向け、内に問題意識を抱いた自発性に基づいて参加してきたメンバーによって構成されているグループ」である。そして、「社会の福祉的課題に目を向け働きかけ、解決していこうとする—ただし、活動的（サービスの）側面と運動的（アクション的）側面をもっている—グループ」であるとも述べている。つまり、ボランティアグループはサービスを提供するだけでなく、福祉的課題を社会に訴えていく運動的側面も備えているということである。しかしながら、前述したように、「福祉問題・生活課題に関心がある」方々であっても、近年の福祉的課題は非常に個別的要素が高く、ボランティアとしてどこまで社会に訴えかけられるのかも迷いが生じると考えられる。つまり、グループとしては活動的（サービスの）側面に重点が置かれることで、その内容も単調化する傾向にあるだろう。

一方で、「仲間やグループ内の人間関係がうまくいかない」、「活動先や対象者との人間関係がうまくいかない」などの人間関係の問題については値が低く、リーダーとしてグループを適切に運営しているという自負がうかがえる。

3. 社協ボランティアセンターに望む支援内容について

社協ボランティアセンターに望む支援内容については、どの項目も2.5点以上となり、社協への期待の高さがうかがえる。その中でも、上位3項目は、「地域の課題や要望の掘り起こし」、「ボランティアへの研修」、「新たなボランティアの開拓・育成」という結果となった。

「地域の課題や要望の掘り起こし」が上位に挙がっているのは、「福祉問題・生活課題に関心がある」という動機で始めた人が多かったという結果とも関連付けられるように、リーダーのタイプが課題解決志向であるといえる。福祉問題や生活課題に敏感である方々であっても、現代の複雑多様化・個別化された地域の課題や要望を把握することは困難である。その点、直接住民と接している社協職員は、課題や要望を把握できる立場にある。また、顕在化していない課題であっても、住民組織や関係機関から情報を収集することによって、新たな課題を見出すことができる。

次に値が高かったのは、「ボランティアへの研修」である。これも、リーダーとしての意識の高さがうかがえる。ボランティアをめぐる状況が日々刻々と変化していく中で、自分たちに求められている役割や機能について、もっと学びたいという気持ちの表れであると考えられる。新崎（2014：55）は、「現在のVセンター（原文ママ）は、情報提供機能や個別相談に対するボランティア・コーディネーション機能が中心で、福祉教育・ボランティア学習機能が脆弱化しているのではないかとの危機感をもっている」と述べている。社協の機能は幅広く、特にボランティアセンターにおいては、ボランティアへの教育のみならず、地域住民の福祉意識の醸成を目的とした福祉教育の展開も求められているのである。

三番目に値が高かったのは、「新たなボランティアの開拓・育成」である。これは、先述のボランティア活動についての課題や問題で挙げられていた「仲間や協力者が増えない」とも関連している。長野県社協の職員である福澤（2020：22）も、「ボランティアの高齢化などの課題は絶えない」、「『地域の担い手が不足している』という言葉も聞こえてくるが、人口減少・高齢化のすすむ地域が多い長野県では、20年前から同じ課題を抱えていたと聞いている」と述べているように、ボランティアの高齢化や後継者不足は古くて新しい課題といえる。

VI. おわりに

内（2001：18）は、「ボランティアグループは、異なる個性や考え方をもつボランティア一人ひとりによってつくられる集団であり、その一人ひとりの自発的な参加に支えられる集団であるという点に、他のグループ一般と比べた際の特徴がある」と述べている。また、難波（2002：77）は、ボランティアは「集団に所属するために集まるのではなく、たまたま個人がやりたいと思う活動がそこにありそうだから集まった」と述べ、「そのため、

個人は集団の維持やマネジメントにさほど注意を払う必要がない」とも述べている。

しかしながら、ボランティアグループで活動を始めた個々のボランティアにとって、倉西・八木（2018：30）が「ボランティアにおける成長は、他者と交わること、または他者からの受け取る刺激によって生じる結果だと言えるだろう」と述べているように、特にグループの仲間間からの刺激は重要である。本研究においても、「多くの人と出会える機会を得たい」という動機で始めた人も多く、他者からの刺激を求めていることがわかる。また、グループのリーダーとしてグループの人間関係にも配慮していることが、「仲間やグループ内の人間関係がうまくいかない」を問題として挙げていない傾向があることから理解できる。

ただし、グループの継続・存続については問題意識を持っており、「仲間や協力者が増えない」や「活動がマンネリ化している」を課題として挙げていた。そして、社協ボランティアセンターに対してもそれらの課題への支援を求めている。

古くて新しい課題である「ボランティアの高齢化」や「ボランティアグループの後継者不足」については社協も十分に把握しているはずである。これまでの入門講座やグループの広報活動のみならず、幅広い世代を巻き込むような取り組みが必要となる。全社協による『市区町村社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター強化方策2015』においては、社協ボランティアセンターは「地域の生活課題を協働的に解決していくことをめざして、『活動の開発やコーディネート』、『学びの機会とネットワークづくり』に取り組むこと」が求められている。より多くの人ボランティア活動に関心をもち、参加できるように、活動の場の開発や活動受け入れの場の確保が重要であり、今後はそのための具体的な方策を提言したい。また、ボランティアグループの継続や、あるいは場合によっては終結への支援方法についても検討したい。

〈謝 辞〉

本研究は「2022年度周南公立大学女性研究者支援プログラム」による研究成果の一部である。

調査にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

〈文 献〉

- 千葉たか子（2010）「『市民的』ボランティア観の構築のために—大学生がもつ『市民』のイメージをもとに—」『青森保健大雑誌』11、77-86
- 広崎順子、酒井朗、千葉勝吾ほか（2006）「NPO活動におけるボランティアの学びと成長」『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要』3、113-122
- 伊藤忠弘（2011）「ボランティア活動の動機の検討」『学習院大学文学部研究年報』58、35-55
- 松田次生（2009）「ボランティアの理念に関する一考察」『西九州大学健康福祉学部紀要』40、53-62
- 巡静一（1981）「第5章ボランティアグループの運営」大阪ボランティア協会編『参加する福祉』
- 守本友美（2022）「ボランティア活動にみる住民の主体性形成に関する研究」『日本の地域福祉』35、55-66
- 長沼豊（2014）『人が集まるボランティア組織をどうつくるのか』ミネルヴァ書房
- 岡本榮一（1981）「第1章ボランティア活動のとらえ方」大阪ボランティア協会『ボランティア：参加する福祉』
- 妹尾香織、高木修（2003）「援助行動経験が援助者自身に与える効果」『社会心理学研究』18(2)、106-118
- 竹内裕二（2021）「持続可能な地域課題解決の可能性に関する一考察：ボランティア活動と活動範囲の関係について」『下関市立大学論集』65(2)、57-71
- 田中富美子、佐藤裕見子、小石真子（2021）「地域における子育て支援ボランティア活動の継続要因」『日本健康医学会雑誌』30、(1)、108-114
- 田尾雅夫（2019）「ボランティアの組織論(1)定義と領域」『経済論叢』193(4)、41-61
- 福澤信輔（2020）「これからのボランティアセンターの役割」『月刊福祉6月号』19-24
- 新崎国広（2014）「社会福祉協議会ボランティアセンターの固有性と課題」『月刊福祉6月号』52-55
- 内慶瑞（2001）「第I章グループを多角的に捉える」ボランティアコーディネーター研修プログラム教材開発研究委員会編『ボランティアグループ活動支援ワークブック』全国社会福祉協議会
- 難波久美子（2002）「ボランティアグループへの同一性とその活動に与える影響について—メンバーシップへの同一性とメンバーへの同一性の2側面に注目して—」『』49、77-82
- 倉西宏、八木俊介（2018）「遺児へのケアプログラムにおけるボランティア体験」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』30、19-31

